



FRONTIER

建設の最前線へ!

PROFILE

もりもと たくみ
森本 拓海 さん
株式会社技研施工
高知県出身



「世の中に残る建設がしたい!」暮らしを力強く支える建設機械圧入機オペレータ。

腰に付けたコントローラーを操り、絶妙な加減で杭の圧入作業を行っているのは、株式会社技研施工で働く森本拓海さん。今、彼が立つのは長崎県長崎市。地域の水道供給の基盤を支えるインフラであり、防災にも寄与する浦上ダムで進められている「浦上ダム建設工事(仮設工3工区)」の現場だ。洪水対策のための貯水池掘削を支える仮設岸壁を造成するこの工事で、森本さんはサイレントパイラー™(技研グループが開発した油圧式杭圧入引抜機)のオペレータとして活躍している。「杭を地中に圧入する作業は目に見えない部分も多く、経験や感覚も重要になる仕事。同じ現場でも10メートル離れただけで地盤条件が変わることもあり、毎日が真剣勝負です」と語る。地盤状況やトルクを丁寧に管理し、機械からの情報を基に判断する冷静さと集中力が求められる日々だ。

「杭を真っ直ぐ、鉛直に保つ。それがオペレータとして一番大切なことです」と話す森本さんは、現場で働く仲間とのコミュニケーションも欠かせない。「自分が正確に機械を動かせるのは、周りの支えがあってこそ。感謝の心を持つことは常に大事にしています。また、先輩方から教わった“機械や道具を大切にすることがわが社の文化”という言葉に胸に、使用後の機械や道具は常にきれいにし、資機材を直角・水平に並べるなど、職場の環境整備も意識しています。きれいに整った現場は、元請けや役所の皆様など、見ている方にも安心していただけます。

土木に携わる祖父の背中を見て育ち、「世の中に残る仕事したい」

という想いから技研施工に入社。携わってきた様々な現場の中でも印象に残っているものとして、東日本大震災の復興工事を挙げる。「何なかった場所に新しい堤防ができあがっていく様子や、自分の手で作り上げていく感覚は今でも忘れません」。また、海外においてもセネガルやドイツの現場に臨み、オペレータとしての技術を高めてきた。「ドイツでは現場の雰囲気も違っており、作業時の服装だったり、日本よりも勤務時間が自由であることなど、文化の違いに驚きました。昼食にみんなでバーベキューをしたことも良い思い出です(笑)」。

現場でのやりがいは「杭がきれいに並び、鉛直に収まっているのを確認した瞬間」と話す森本さん。その感覚をさらに極め、今後は硬質地盤や50メートル級の超長杭といった難易度の高い現場にも挑戦したいと意欲を見せる。「もっと経験を積んで技術を磨き、どんな現場でも任せてもらえるオペレータになりたいです」。

「技研施工は新しい技術を試し、世の中に広めていく会社。宇宙でも活かせる圧入技術の開発にも挑戦しています。そんな最先端に関わることを誇りに思いますし、未経験の方でも育てる体制が充実しているので、やる気のある人!! ぜひ一緒に働きたいです。オペレータは正確さが求められますが、自分がイメージした通りに杭を圧入できたときの達成感は格別。多くの人に挑戦してほしい仕事です」と、建設業界を目指す人たちに向けてエールを送る。「世の中に残る建設」を担い、今日も森本さんはその目を現場へと向けている。

この度、弊社の取り組みを評価いただき、「不動産・建設経済局長賞」および「優秀賞(女性定着促進部門)」を賜りましたこと、大変光栄に存じます。

近年、建設業界では慢性的な人材不足が続く中、採用や育成に多くの課題が見られています。それに対し弊社では、Instagram活用による母集団形成と3Kイメージの払拭(新3K)、新入社員の離職を防ぐためのブラザー制度(OJT)、さらには育休取得率100%の実現といった取り組みを進めてまいりました。

今後も「未来を想う技術と感性で理想を日常に」の実現を目指し、より良い施策を推進することで、建設業界全体の発展に寄与してまいります。

建設人材育成優良企業表彰『不動産・建設経済局長賞』、『優秀賞(女性定着促進部門)』を受賞

Great Job!



株式会社技研施工
代表取締役
社長 CEO

西川 昭寛 氏

建設業しんぶん

May. 2025 No.568

令和7年5月10日発行
第50巻 第2号 通巻第568号

編集 発行

建設業振興基金

〒105-0001

東京都港区虎ノ門4-2-12 虎ノ門4丁目 MTCビル2号館

建設業

建設産業の今を伝え
未来を考える

しんぶん



特集

建設事業主等に対する助成金



建設キャリアアップシステム

人を大切に育てる新しいシステムです
事業者・技能者みなさまのご登録をお願いします

建設業振興基金

FOCUS

“本物”に触れて、“未来”が動き出す。
——現場とともに育てる、建築教育の今。

令和3年4月、グローバル化・デジタル化の進展に伴う産業界のニーズの変化を踏まえ、以前の“愛知県立佐織工業高等学校”から学校名を改称した“愛知県立愛西工科高等学校”。従来の“建築科”から“建築デザイン科”への科名変更も行われ、新たな学校としてスタートしました。今回は、幅広い教育活動を通じて生徒の将来に寄り添う取り組みを展開している同科において、14年にわたり指導を続ける富山正士先生に、日々の実践とその背景にある想いを伺いました。



愛知県立愛西工科高等学校
建築デザイン科
富山 正士 先生

現場とつながる体験で、 建築の“リアル”を知る

卒業後に建築やものづくりの分野で幅広く活躍できる“人財”の育成を目指す建築デザイン科。「建築の面白さを感じてもらうため、企業の皆様にもご協力いただきながら授業を組み立てています。近年では、鹿島建設と協会の皆様との連携による『建設業セミナー』を継続的に実施し、建設業界の魅力や現在進められている大型プロジェクトなどを紹介していただいたり、それぞれの仕事内容や魅力を語っていただくなどして、生徒が建設業界のリアルに触れる機会を設けています。また、建設産業専門団体中部地区連合会主催の『合同体験フェア』にも参加し、様々な専門工事

の職業を体験できるようにしています。

同校では、加向建設による型枠組立、浪花組による左官、伊藤組による足場組立などの実技講習も実施。プロの技術を間近で体感しながら学ぶ環境を整えている。「体験後に“面白かった!”と目を輝かせる様子を見ると、やはり実体験の力は大きいと感じます。また“こういう仕事もあるんだ!”と知るだけでも、生徒たちの視野は広がります。実施後のアンケートを見ても、技能や知識の習得だけでなく、生徒が自身の将来像を描く手助けにもなっていると感じます」。

企業によるセミナーや実技講習会は、富山先生にとっても楽しみの一つだ。「講習会などでは、かつての教え子たちが生徒に教える立場として訪れることがあります。社会人としてたくましくなった姿を見

るのは、私にとっても楽しみ。“今は大きな現場で頑張っています!”といった言葉などを聞くこともあり、本当に感無量です」。

現場見学やインターンシップも、生徒が仕事のリアルに触れる貴重な機会。インターンシップは2年生全員が対象となり、複数の企業を体験する生徒もいる。「インターンシップ参加をきっかけに入社を決める生徒も多く見られます。やはり直接職場を目にして、こういった雰囲気なのかを体験するほうが、それぞれの企業の魅力が伝わりやすいのだろうと実感しています」。

資格取得と成功体験が、 自信と成長の礎に

卒業後の生徒の力となる資格の取得サポートにも力を入れている同校。「日建学院と連携し、2級建築施工管理技術検定（第一次検定）や1・2級建築士の資格取得に向けたサポートなどを実施しており、今後も継続的に取り組んでいきたいと考えています。生徒の中には前期で2級建築施工管理技術検定（第一次検定）に合格し、後期で2級土木施工管理技術検定（第一次検定）に合格する生徒もいます。ジュニアマイスター顕彰の特別表彰をいただくなど、資格取得が生徒の力となり、自信にもつながっていると感じています。施工管理の勉強においては、本校ではパソコンやスマー



職種体験や実技講習会など、現場で活躍するプロフェッショナルの指導のもと、多くの体験を通じて学びを深める生徒たち。「現場の方に仕事に対する想いなどを伺う機会もあり、こういったところにやりがいを感じるかなど、働く方の生き方にも触れることができ、生徒自身が5年後、10年後といった将来像を描くための学びにもなっています」。



富山先生が主顧問を務める建築デザイン部。「春は5月末開催のものづくりコンテストに向けて練習に励んでいます。その後は製図コンクールやCAD検定に向けて取り組んでいるほか、年間を通して技能検定の資格取得に向けた練習なども行っています。先輩が後輩をサポートし、お互いに学び合える環境が形成されている

トフォン上で過去問題に挑戦できるアプリケーションなども活用し、自宅でも取り組むことで力をつけられるようにしています」。

令和2年より、卒業後すぐに2級建築士試験を受験することが可能になったことを受け、建築士の資格取得にも積極的だ。「本科では、進学を見すえた『アカデミックコース』と、専門の知識・技能を学ぶ『エンジニアコース』を設けており、どちらを選択しても卒業後に2級建築士試験の受験資格を得られるようにしています。卒業後に2級建築士資格を取得した後、早期に1級建築士の資格を取得する卒業生も現れるなど、生徒が存分に力を発揮できる土台が整ってきたように感じています」。

卒業後、技能の道に進む生徒も多い同校。「技能検定の資格も一つ取得すれば終わりではなく、“次はこの資格を取ってみたい”とチャレンジを続けていく生徒も多くいます。一つひとつの成功体験が意欲や自信を高め、新たな挑戦にもつながっていくと見ています」。

学び合い、教え合いながら、 自ら未来を切り拓く力を

ゼネコン勤務を経て、教職の道へ進んだ富山先生。「大学の恩師に声をかけていただいたことが教職に進むきっかけとなりました。すっかり教員生活のほうが長くなりましたが、

授業の中など現場のことを折に触れて話すようにしています」。

近年は生徒と同じく技能検定にも積極的に挑戦し、建築大工2級や鉄筋組立3級を取得。資格取得を通じて培ったスキルや学びを、資格に挑戦する生徒たちに還元している。

「“学ばない指導者は、人に教えるはいけない”という言葉も、以前にサッカー部の顧問をしていた頃に教わり、今も自分の中で意識しています。技能検定についても知識だけでなく、自身の経験として身につけておけば、授業や指導の中にもダイレクトに反映されます。今年は左官の3級、とびの3級、型枠施工の3級の技能検定取得を目標としています」。

大切にしているのは、生徒が主体的に学び、成長していける力を養うことだ。「学習指導要領の変化もあり、教える側が一方的に知識を伝えるというやり方ではなくなっています。今は生徒1人につき1台タブレット端末を持っているので、わからないことはできる限り自分たちで調べたり、教科書の内容を自分たちでまとめさせて発表してもらうなど、主体的に学べる力を身につけられるよう図っています」。

顧問を務める建築デザイン部においても、生徒が自分たちで学び合い、成長できる環境を大切にしたいと話す。「地域のイベントに参加してものづくり教室を開催する活動も行っていますが、1年生の頃にはなかなか喋ることができず説明も

コレ推し! 地元の建築物



540年に創建されたといわれる歴史的な神社。織田信長や豊臣秀吉などの武将からも厚い信仰を受け、社殿の造営や寄進が行われました。正月や秋祭りなど、年間を通じて多くの祭事が行われます。「本校から約5km程度の距離にある、多くの人々に親しまれるスポットです。サッカー部の顧問を務めていたころには本校から津島神社までジョギングしていた思い出があり、今も建築デザイン部のみんなと訪れます」。

タジタジだった生徒が、3年生になると顔つきが変わり、後輩たちにお手本を見せたり、人前でも堂々と話ができるなど、成長した姿を見せてくれます。資格取得や大会出場、ジュニアマイスター取得といった経験を通して成長していく様子を見ると、すごく頑張ったんだなと感慨深くなります。また、そうした先輩たちの姿を見て後輩たちも学び、より力を伸ばしていくものと感じています」。

地域・企業との連携によって、建設業界のリアルに触れる学びを提供する同校。その最前線で教鞭をとる富山先生の言葉の一つひとつから、生徒へのまなざしと教育への熱意が伝わってくる。



先生から
みんなへ
メッセージ

授業風景

地域の想いに支えられ、 ものづくりの魅力を実感!



地域の企業により提供された足場を用いた足場組立や、鉄筋組立に取り組む生徒たち。最初は慣れない手つきで作業を始めるが、徐々に目の前の作業にのめり込む様子が見え始める。「授業の中で実際にものづくりを体験することで建築の面白さを実感し、“資格取得にも挑戦したい”というモチベーションが生まれます。そうした学びができるのも、地域の皆様のご協力があってこそ。その想いに感謝するとともに、生徒のために大いに活用させていただきたいと思っています」。



愛知県立愛西工科高等学校

〒496-8018 愛知県愛西市洲高町蔭島1
WEB <https://aisai-te.aichi-c.ed.jp/>